

---

# 北極星は動かない

谷川修一郎

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

北極星は動かない

### 【コード】

N4671B

### 【作者名】

谷川修一郎

### 【あらすじ】

病院のベッドに縛り付けられた不遇で情熱的なある冒険家の夢。

北極星は動かない。

GPSが発明される前、この動かない星は航海をする上でとても重要な役割をになっていたのだという。ほう、なるほど。昔の人は頭がいいな。と、ちょっと前までのわたしは自分の思い込みに気付かないでいた。それで好きな星は何かと聞かれたときには、運動し続ける宇宙でたった一つ動かないからという理由で北極星をあげていたのだ。

「北極星は自転軸の延長線上にあるから、動かないように見えるだけなんだよ」

そう教えてくれたのはセイヤだった。

北極星のよく見える夜には無性にアール・グレイが飲みたくなる。

セイヤは星のとりこだった。本当は漢字で名前を書くときには誠矢という文字を使うのだが、本人はよく星夜という字を当てていたし、自己紹介をするときなどは決まって「夜空の星で星夜っていう判断がつけば、どんなときでも星夜という字を使うものだから問題になることもあった。それでもセイヤは我を曲げずに自分が付け直した名前を掲げ続けた。

だからわたしも彼の意思を尊重して、名前を書く機会にはセイヤとカタカナで記すことにしている。星夜と書かなければセイヤには怒られてしまうかもしれないけれど、わたしにとってセイヤは夜空の星であるのと同時に「矢のように誠実な人間」なのだった。

とにかく、彼はもういない。どんなに愛しく思おうとも、もう二度とこの腕で抱きしめることはできないのだった。そりゃあもう寂しくて堪らない。だからわたしは夜空に彼の星を探すのだ。

ポラリスはセイヤの所有物である。こんなことを言うと馬鹿にされるかもしれないけれど、嘘だと思っのなら一度ポラリスへ行ってみると良い。そこには彼の到着した痕跡が確かに残されているからだ。

セイヤの話によれば、ポラリスとわたしたちが呼んでいる北極星は、三つの星の集合体なのだそう。私たちの目でも捕えることができるポラリスAは太陽と同じく自ら照りかがやく恒星であるため、セイヤは着陸をなくなく諦めたらしい。代わりにポラリスBへ着陸したのだそう。

ポラリスBは太陽系で言うと火星のように気温の低い星であったという。しかし寒いからといって北海道みたいに雪が降ることもないし、マスクに霜がつくこともないそう。セイヤ曰く。なかなか快適であったという。

アメリカが月面に星条旗を立ててきたのに倣って、到達記念にとセイヤはポラリスBに自ら作った旗をさしてきたらしい。その旗のデザインというのはわたしの似顔絵だった。一度、その製作現場を目にしたことがあるけれど、その目隠しして作った福笑いのおたふくのような顔をさして、わたしのことだと言われたとき、衝撃を受けて怒りたくもなかった。

十七年という生涯のほとんどをセイヤは病院のベッドに寝て過ごした。

誰が悪いのでもなく、ただ運が悪いのだと彼自身は諦めていたけれど、わたしはそれが神様の戯れであることを疑わなかった。したり顔でわたしたちを見おろす神様の影をなんとか生活から追い出したくて、破魔矢からクリスマスツリーまで、目に見える神々しいものは何もかもを処分した。それでも神様はついてきた。

わたしの母は熱心な宗教家だった。祈祷書なるものを年に何度か渡されるのだが、なんでもご本尊様のところまで通ってようやく手

に入る大変高価なものだそうで、こつそり処分するとき、あまりよい気持ちがいなかった。

これさえあれば大丈夫だと母は言っていたけれど、わたしにはただの紙切れにしか見えなかった。セイヤの体調が良くなったのだと言え、母はそれが全て神様のおかげなのだと言え、頑なに信じて疑わなかった。

良いことは全て神様のおかげであり、悪いことには神様は一切関与していない、そのような考え方を母とは違って、わたしにはもう気まぐれな神様などをあてにする余裕はなかった。こんなことを母に言えば、セイヤの状態が急変したときに何を言われるものか分かったものではない（いや、十分に分かりきっている）ので、母にはセイヤのことを話さなくなった。

母が宗教に走るようになったのは、わたしが生まれた瞬間なのだという。

もともと滅茶苦茶な人だとは思っていたけれど、まさか生まれる前に一度殺されかけていたことを知らされたときは、さすがのわたしも驚いた。

母曰く、妊娠六ヶ月目のその日、どうしても馬に乗りたくなったのだという。

おなかも出てきているはずだし、父は何度も止めたらしいが、それでも母は馬に乗っておなかの中のわたしに最初の恐怖を体感させてくれた。流産になりかけたそうだけれど、わたしはどうか無事に生まれてくることができた。出産の直後、母はまだ目の開ききっていないわたしにこう言ったのだという。

「神様のおかげだね」

そうやって育てられたものだから、家は神々しいものでいっぱいだった。わたしも小さい頃からまず神様が大事なのだ教えられてきたので、生活から神様を追い出すのは他人が思うよりずっと難し

いことだった。

セイヤはそんなわたしの格闘ぶりに対して、馬鹿だなあと笑うだけだった。彼は神様などいないことを知っていたのだった。それは自らの境遇と信念からくる確信であり、現に、彼の冒険したこの広大な宇宙には、そんな生物のいる形跡は見つからなかった。

母とセイヤ、どちらの話を信じるべきか。考えるまでもない、世界中の人間が口をそろえて嘘っぱちだと批判しても、わたしは最後までセイヤの味方を続けるだろう。

セイヤの日帰り宇宙旅行は、日に日にその距離を伸ばしていった。月面着陸に成功して星条旗を引き抜いてきたという話をしてから、彼は火星、木星、土星と太陽系の惑星を一回りして、それから銀河系の星を巡り、そしてアンドロメダへと飛んでいった。

時間漏斗曲線という時空移動装置を使っているため、地球の一日に相当する時間でどこまででも行ける。でもこの時間漏斗曲線は時間を縮めたり伸ばしたりするものではなくて、いわば漏斗外にいる人間を錯覚させるだけに過ぎないので、わたしが病室を帰って翌日また尋ねるまでに、セイヤはその何倍もの時間を生きていたということになる。

遠くへ行ったということとは、長い時間を過ごしてきたということだ。セイヤが一つ向こうの惑星を目指せば、帰ってきたとき病状が悪くなっているのは当然だった。激しく咳き込むようなこともあったが、星の海のできごとを話している間、セイヤは紛れもなく生きていたのだった。子供のように爛々と瞳を輝かせ、舌がもつれるのではないかと心配になるぐらい、衝動のまま喋り続けた。そんな時間がいつまでも続けばいいと思っていた。

神様は信じないから、この件について、その誰ともつかない彼を誹謗中傷するつもりはない。ただ、セイヤは死んだ。それだけのことだった。

そして、それだけのことが、わたしにとって心が張り裂けるほどに辛いのだった。

最後の瞬間を、わたしは彼の手を握りながら過ごした。セイヤの枕元の机には、冷めたストレートティーが、ほとんど手の付けられないままに置いてあった。

お医者さまから最後に好きなものをとっていいよというゆるしを得たときに、セイヤが自ら選んだ、いわば彼にとっての最後の晚餐だった。どうして紅茶なのかとわたしが訊くと、宇宙旅行では紅茶が欠かせないのだと彼は寂しそうにいった。

「地球の紅茶は熱すぎるね。冷めるまでとっておくよ」

紅茶を少しとったあと、ほとんど言葉も交わせないままにセイヤは息絶えてしまった。それは、とても静かな最後だった。

悲しみの乗り越え方にはいろいろあると思うけれど、わたしにとって宗教は役に立ちそうにないし、かといって他に何かが見つかりそうな気もしなかった。それでとりあえず紅茶の缶を買ったのだ。わたしには星の海を飛んでいけるような行動力も、想像力もなかったけれど、紅茶を飲んでいけるとセイヤが隣にいるような気がした。一緒に紅茶を飲んだことなんか一度だつてないというのに。

どうしてアール・グレイを選んだのか。理由は簡単だ。知識のないわたしにとって、どことなく宇宙っぽさを感じられる名前だったのだ。アールはRで、宇宙船の名前についていそうだった。グレイはあの背の高い地球人二人に両手を持ち上げられるようにして捕まっていた宇宙人の名前だ。我ながら陳腐な発想だとは思いつけれど、思い込むのは自由。

わたしは今日も北極星を眺めつつ優しい紅茶の匂いの中で生きつづけている。居なくなってしまった息子のことを思い浮かべながら。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4671b/>

---

北極星は動かない

2008年11月7日08時08分発行